

発達検査と対人援助学

⑭ 私たちが縛られているもの

大谷多加志

11月11日・12日は広島で開催された対人援助学会第15回大会に参加してきました。対人援助学会に入会して10年以上になりますが、前職の時はほぼ毎回仕事と重なって参加できなかったのと、2020年からはコロナの影響でオンライン開催だったため、実は対面で参加したのは初めてでした。

たぶん、今号では他の執筆者の方も大会のことを書かれているのではないかと思います。数多くの執筆者の方と現地でお会いできたというのもとてもよかったですし、それ以上に非常にたくさんの刺激と出会いに恵まれ、これまでの様々な学会参加の中で最も学ぶことが多く印象深い大会となりました。今回は学会での学び、気づきを踏まえて、連載のテーマである「発達検査と対人援助学」について書いてみようと思います。

オプションツアー 被爆樹木に会いに行く

大会初日。開会はお昼からでしたが、午前中は希望者のみで広島市内にある被爆樹木に会いに行くという、オプションツアーに参加しました。被爆樹木というのは、原爆投下時から現在まで生き永らえたことが確認されている樹木のことです。現在150本あまりが被爆樹木であることが確認され、登録されているそうです。広島市のホームペ

ージにも掲載されているので（<https://www.city.hiroshima.lg.jp/soshiki/48/9262.html>）、ぜひ機会を見つけて会いに行ってもらえたらと思います。

被爆樹木は、さまざまな形で被爆の影響を受けています。爆心地側の幹が焼けてしまったため、反対側が補うように成長した木もありましたし、被爆の影響で上にまっすぐ伸びることができず、うねるように成長した木もありました。

被爆樹木を見に行く前、被爆樹木を見て自分が何か感じるものがあるのか、正直ちょっと想像できていない部分がありました。先に見た「被爆建物」（袋町小学校平和資料館）では、被爆当時から残る地下部分や、そこに書き残された家族を探す伝言メッセージから、被爆直後の町にいた人々の思いや存在を感じることができました。



一方で、今回見に行くのは自身では何も語ることはない“樹”です。そんなわけで、自分が何の感想も抱くことができないかもしれない…という一抹の不安を持ちながら被爆樹木に会いに行きました。



被爆樹木を見ながら『簡単に、被害－加害の話にしてしまわない』という言葉が思い出されました。団編集長のお話にも何度か登場して、そのたびに「なるほどね」とわかったような顔をしていたのですが、実のところまったく理解できていなかった気がします。被爆樹木は、たまたま日本にいただけで、日本軍の味方でもなければ、もちろん米軍の味方でもありません。爆心地近くにあったため深いダメージを受け、それでも生き永らえることができた樹が、その傷を抱えたまま生きてきた姿がそこにありました。

「被害－加害」を超えて、ただただ「人の行い」について考えさせられる時間がとて

も貴重で、学会後半での体験も含めて“私たちは何に囚われているのか”を考えるきっかけとなりました。

三島由紀夫のことば

大会2日目、マガジン執筆者でもある本間氏の企画の中で登場したのが、三島由紀夫の『感受性よりもむしろ理性の方が人を狂信に導きやすい』という言葉でした。被爆樹木を見た後、広島で耳にしたからこそ、私にはとても響く言葉でした。

以前、ドキュメンタリーで、原爆を投下したエノラ・ゲイのパイロットへのインタビュー映像を見たことがあります。“原爆投下は正しかったと思うか”と尋ねるインタビューに、固い表情で「命令だった」「原爆のおかげで戦争は終結した」「正しかったと信じている」と述べるパイロットの姿が印象に残っています。子ども心に、本心からそう言っているのではなく“そう信じようとしている”ことがわかり、現実を直視せず、間違いを認めようとしなない人だと、非難の気持ちを抱いた記憶があります。今にして思えば、数十万人の命が失われた事実を前に、“そう信じるしかない”ことは理解できません。さらに、攻撃を指示する立場にあった指揮官は、もっとあっさり「必要なことだった」と述べていました。

人は時に感情的に、かっとなって人を傷つけたり殺めたりすることがあります。でも、数十万人を殺傷して、それを「必要なことだった」と信じ、言わしめるのは“理性”の方で、そこにこそ人の恐ろしさが凝縮されているように感じました。

子育て講座で感じたこと

他にも、ソーシャルブックカフェ「ハチドリ舎」との出会いなど、学びと刺激が盛りだくさんの大会だったのですが、それはいったん置いておいて、大会後のお話です。

先日、子育て中の保護者さんに向けて、お話させて頂く機会がありました。内容は「いやいや期との付き合い方」について。発達心理学の観点からいやいや期について説明し、自分自身の育児や仕事上の経験も踏まえて、いやいや期との付き合い方について“例えばこんな方法もあるよね”というお話をしたのですが、話が終わってから“そもそもなんで多くの保護者がいやいや期に苦勞するのだろう？”ということが気になり始めました。

大人にとってストレスになる子どもの行動は大きく分けて、「できないのにやると言う」または「できるのにやらない」という2パターンに分けられるように思います。自力では靴を履けないのに「自分で！」と言ったり、もう終わりだよと言っているのに「いやだ！」と譲らないのが前者、自分で歩けるのに「だっこして」と言ったり、保育園に行くとかわかってるのに「行かない」と言い出したりするのが後者です。

「できないことをやらない(してもらう)」ことには、大人はそれほどストレスを感じていないように思います。まだ歩けない赤ちゃんに対して「なんで歩いてくれないの！」と腹を立てたりはしないわけです。一方、「できるのにやらない」、「できないのにやる」という行動には、反射的に怒りやイライラが生じているように思えました。この背景には、「なんで？」とツッコめる余地があるかどうかの影響しているように感じ

ます。「なんでできないことをしないの？」とはツッコめませんが、「なんでできるのにしないの？」とはツッコめます。

よく考えると、「できることをしない」というのも、感情では十分理解できるものです。「今から頑張れば夕飯作り間に合うけど、今日は買っちゃおう」というのは広い意味では「できるけどしない」なのですが、大人だってそういう気分の日もありますし、そのくらいの余裕は自分に許してあげたいです。そして「できないことをする」ですが、人はこれを「挑戦」と呼ぶのではなんでしょうか。まだできないけど英語をしゃべれるようになりたい、いずれマラソンを完走したいという思いは、理由はなくても素敵です。でも、つい「なんで？」と怒ってしまったりします。現代社会の中で、合理的、効率的、科学的であることが無条件に良いことであると、いつの間にか、なかば思いこまされている気がして、少しくすら寒いものを感じました。



私たちは何に縛られているのか

私たちがいかに、無意識的に合理的・効率的・科学的なものが「是」であると思いきまされているか、少し危機意識も持ちながら実感しました。

先述の「ハチドリ舎」は、“社会問題を引かれずに話せる場”であることを目指しているそうなのですが、実際にその通りであると目の当たりにしました。学会の懇親会が「ハチドリ舎」で行われたのですが、その日、たまたまパレスチナ問題の専門家がお店にやってきて、大会参加者の心理職者との間で、“イスラエルで開発されたトラウマケアの技法を用いることについてどう思うのか”という議論が巻き起こりました。ひとつの意見として、“技術自体には罪は無いし、有効であるのだから、作られた経過を理解した上で有効に使うのがよい”という意見がありました。他方、パレスチナ問題の専門家はそのことに理解を示しつつも、イスラエルに対するボイコットとして、経済的な交流だけでなく全面的な停止が必要だと思う、という意見を述べていました。

その場でひとり、心理士でありながらトラウマケアとイスラエルとの関係を知らなかった私は、全然違うことを考えていました。それが、大阪でのカジノ建設を巡る議論のことでした。カジノができることによってギャンブル依存が増加する懸念が示される中、推進側は「ギャンブル依存対策もする」「関西の経済にはプラス」と主張していました。カジノ建設自体の是非を議論するつもりはないのですが、不幸な個人が（ほぼ確実に）発生するリスクよりも全体としての経済的利益を取るという判断の背景には、やはり合理性・効率性優位の判断があるよ

うに感じられます。例えばここでギャンブル依存についての研究が進んだとしても、それは喜んでいいことなのでしょうか。問題を生み出す仕組みを放置したまま、ただ善意で目の前の人のケアにあたっていることが、結果的にその仕組みの維持に加担していることになる、という可能性もあるのだと感じました。また、「原子力」という技術が、何もかもを根こそぎ破壊した街で「技術に罪はない」と言う言葉に、どこか危ういものを感じずにはいられませんでした。

ようやく最後になって「発達検査」の話ですが、今回感じたことは、さまざまな援助場面にも通じるものであり、もちろん検査を用いた援助場面にも当てはまると感じました。検査に対する社会的信用の背景に、「客観的」「科学的」なものであるという認識があると思います。検査の判定や解釈が正しいかどうか必要以上に意識を割いてしまうのも「正しいこと」が是である、と囚われている部分があるのかもしれない。なるべく成功しそうな助言のノウハウを得たいと思うのも、効率性の罠かもしれません。

合理的、効率的、科学的の思い込みをいったん置いて、目の前の子どもをそのままとらえること。シンプルなことであるようで、合理性や科学的なものを是とする視点に取り込まれた私たちにとっては、なかなか難しいことなのかもしれないと感じます。